

図1. PTS発生率：
弾性ストッキングによる圧迫療法群vs 対照群（プラセボストッキングまたは圧迫療法なし）

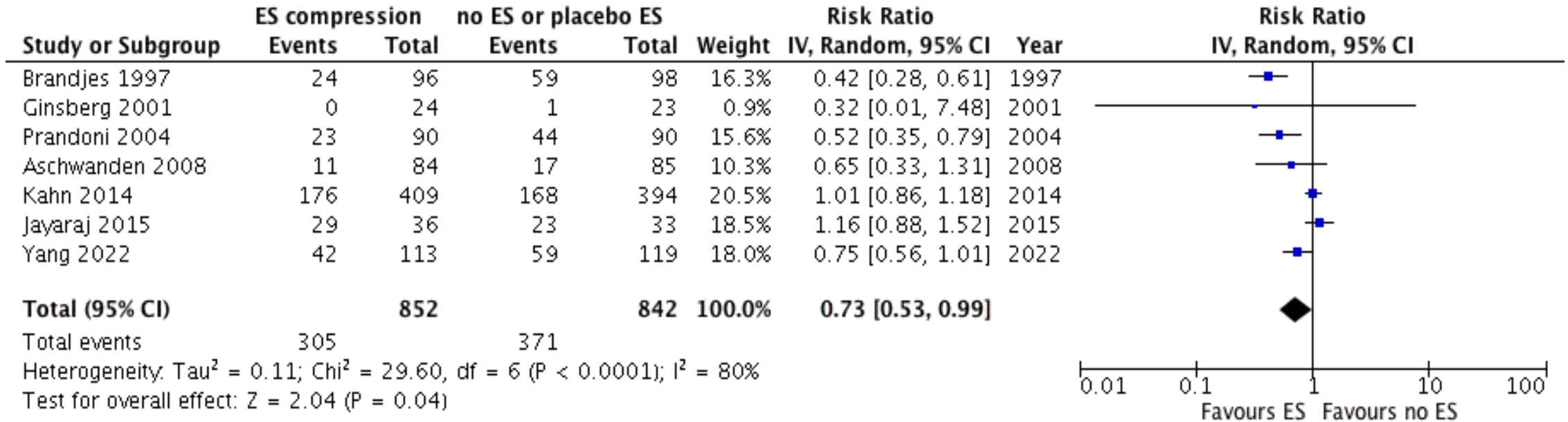


図2. 重篤ではない有害事象 (minor adverse events、皮疹や掻痒感) の発生率：
弾性ストッキングによる圧迫療法群 vs 対照群 (プラセボストッキングまたは圧迫療法なし)

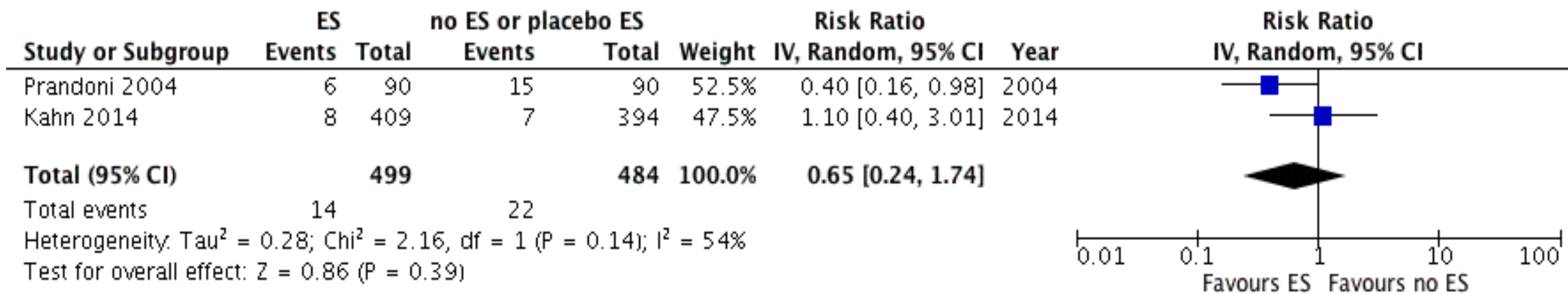


図3. 重篤ではない有害事象 (minor adverse events: 掻痒感、紅斑、アレルギー反応) の発生率: 大腿部までの弾性ストッキング vs ハイソックスタイプ弾性ストッキング

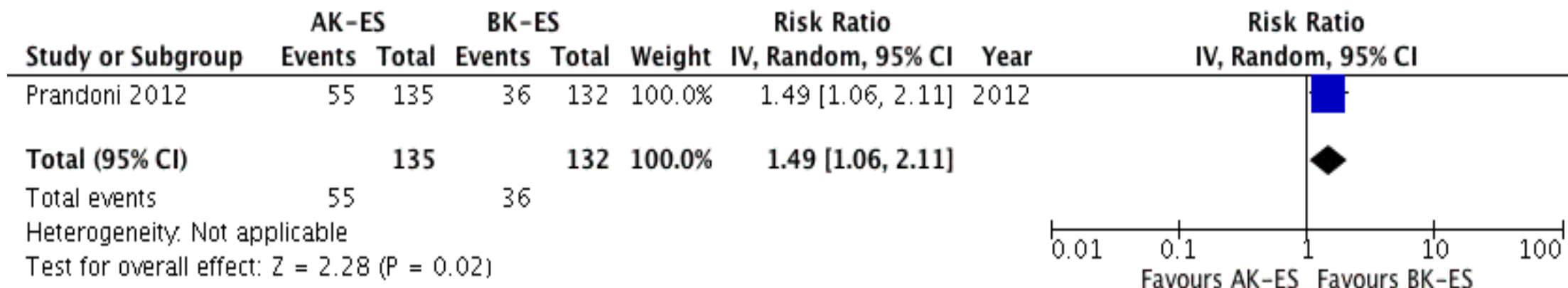


図4. PTS発生率：
弾性ストッキング着用期間、1年以下 vs 2年

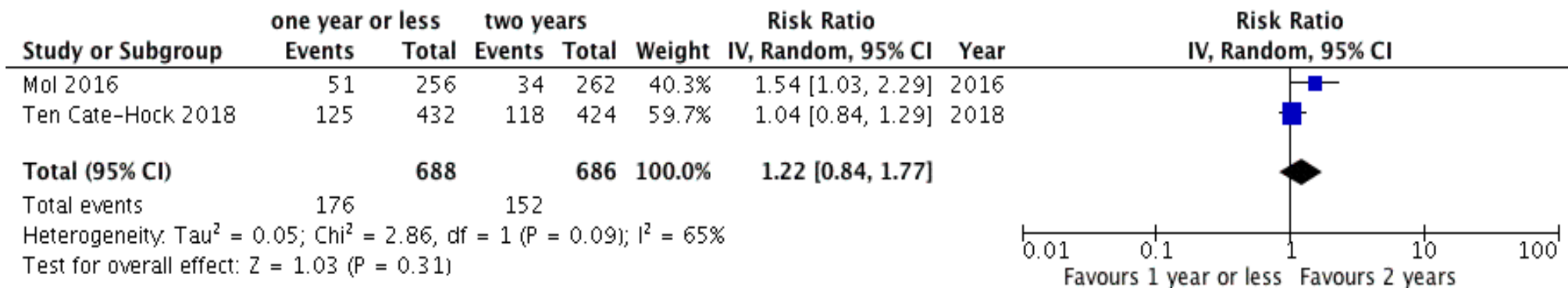


図5. PTS発生率：
弾性ストッキング圧、25 mmHg vs 35 mmHg

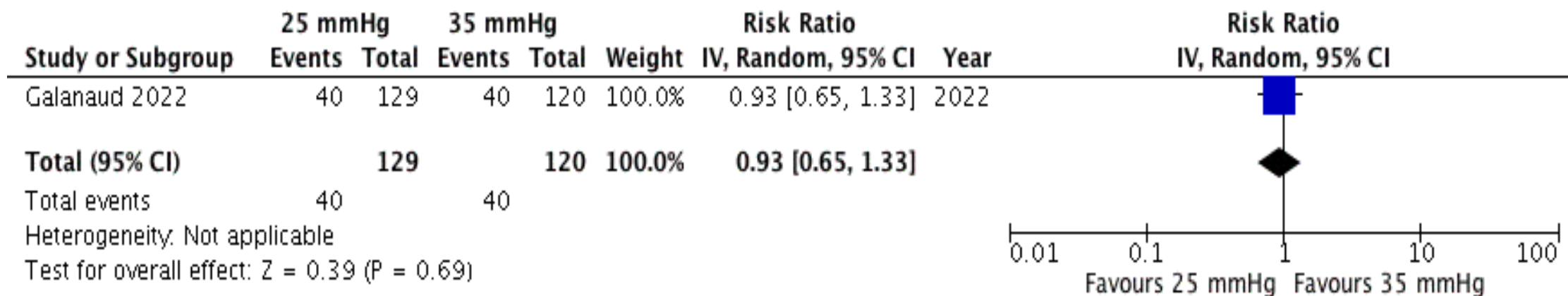


図6. 重篤ではない有害事象 (minor adverse events: 皮膚症状) の発生率: 弾性ストッキング圧、25 mmHg vs 35 mmHg

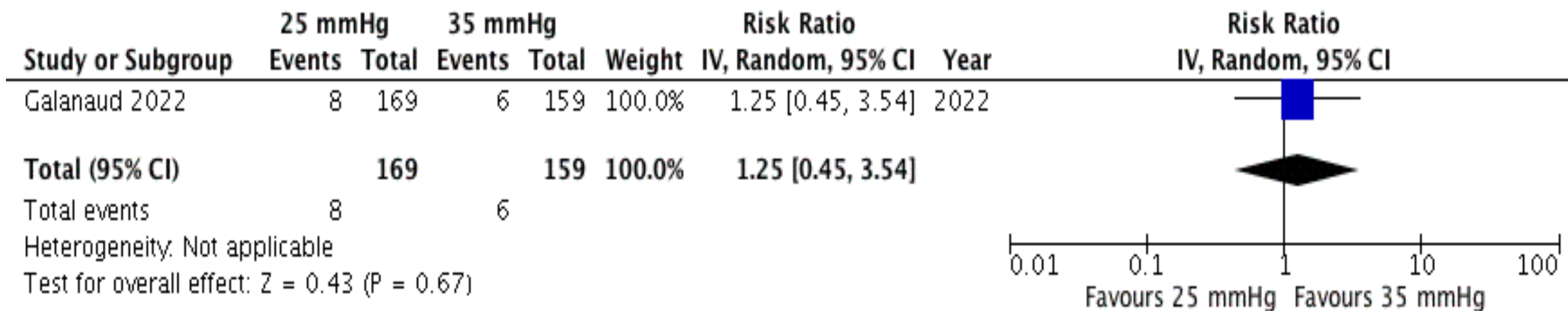


図1

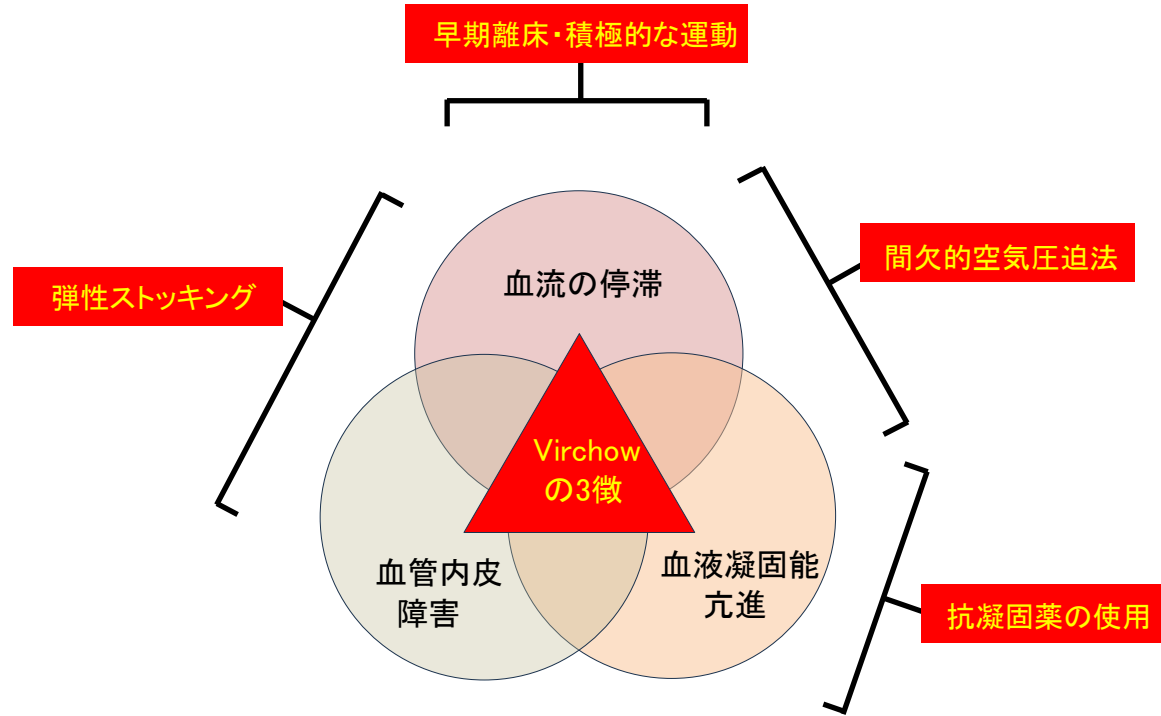


図2

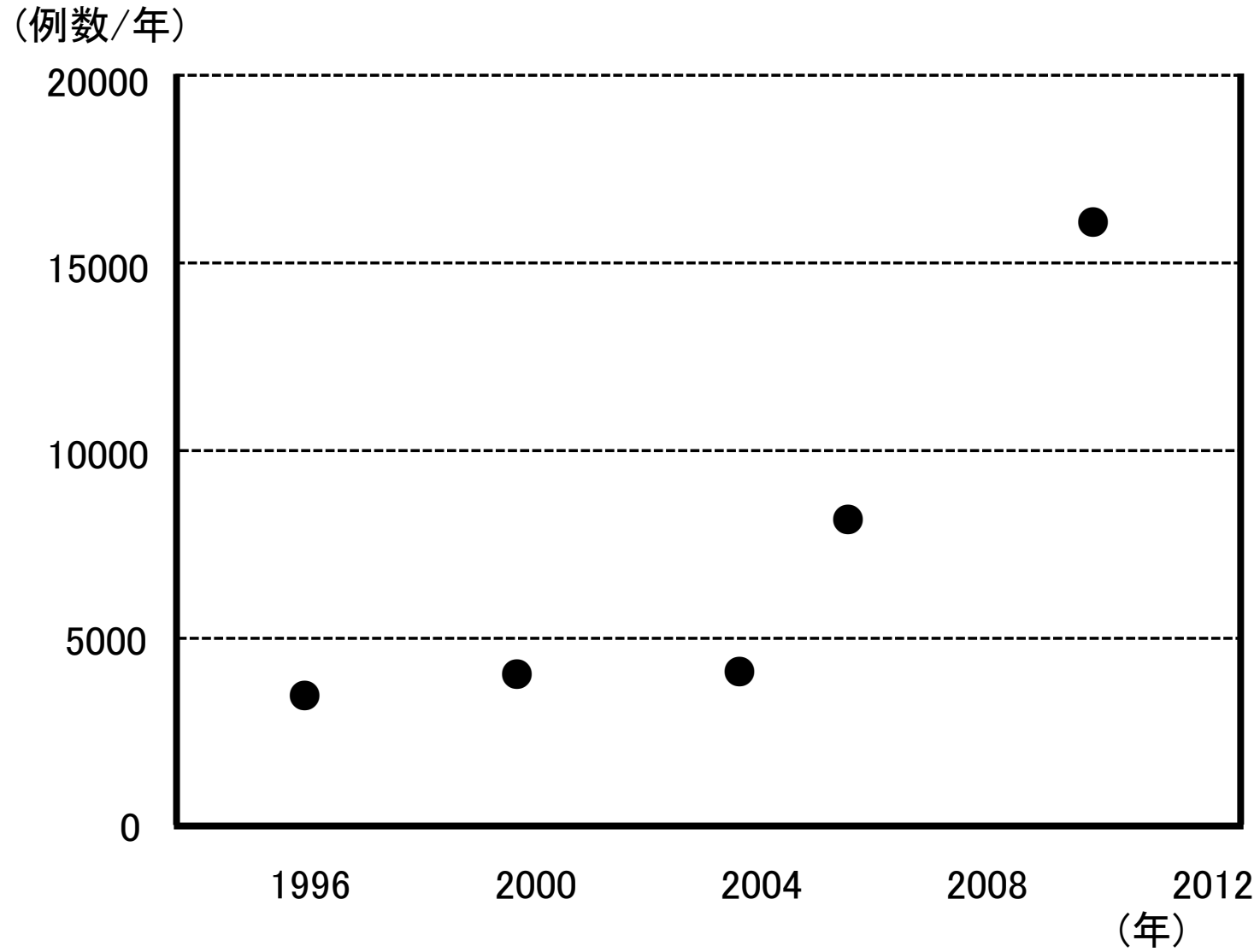


図3

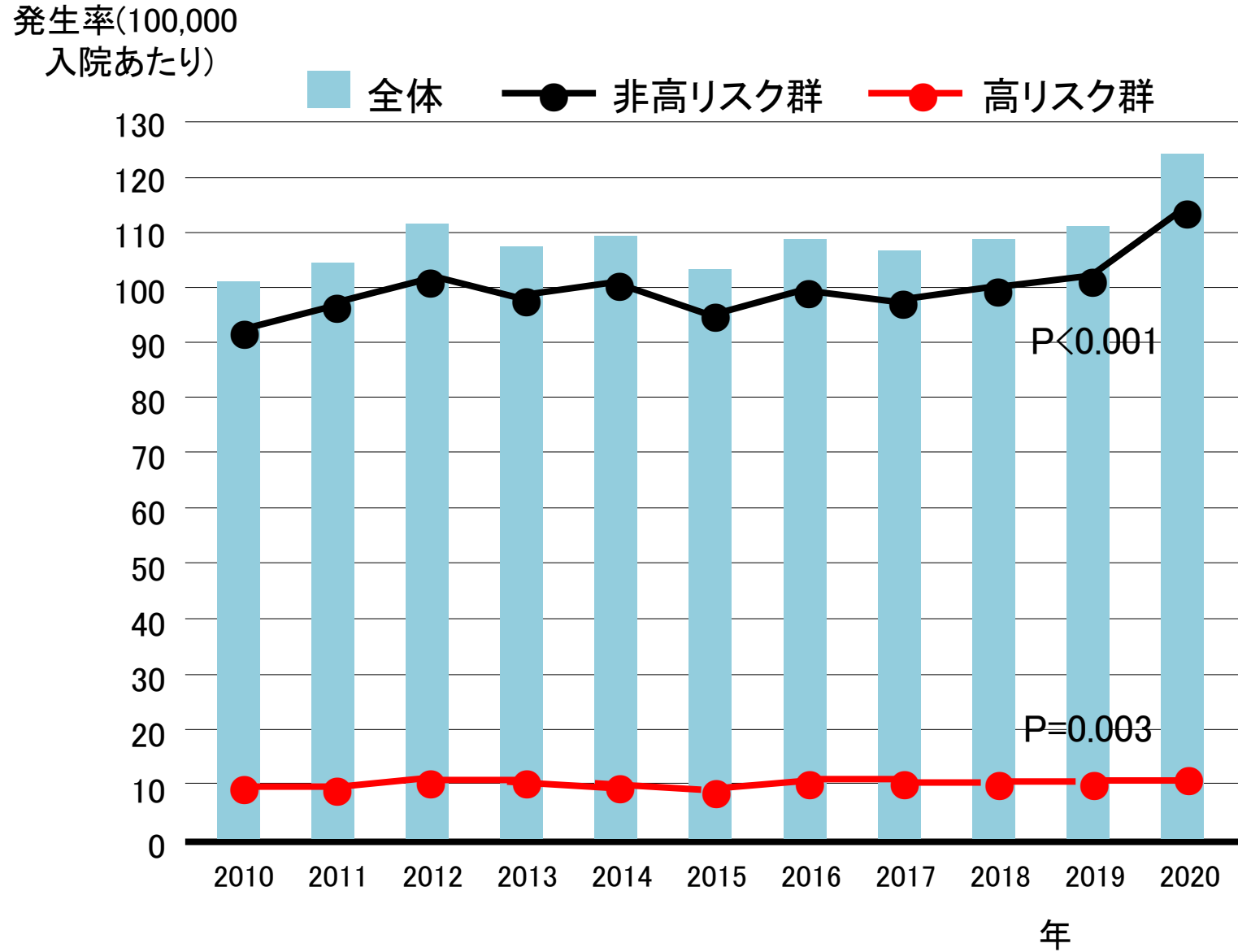


図4

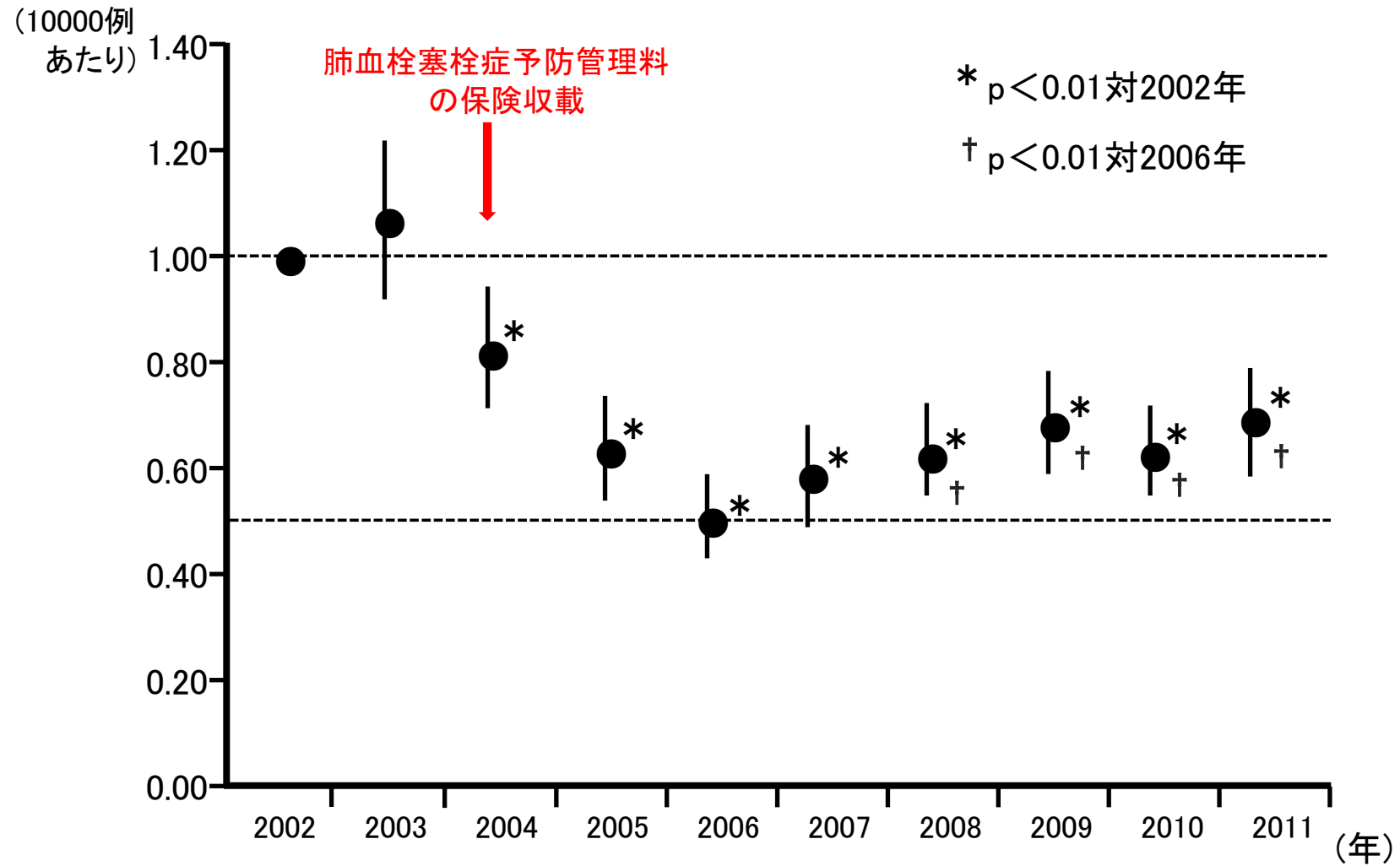


図5

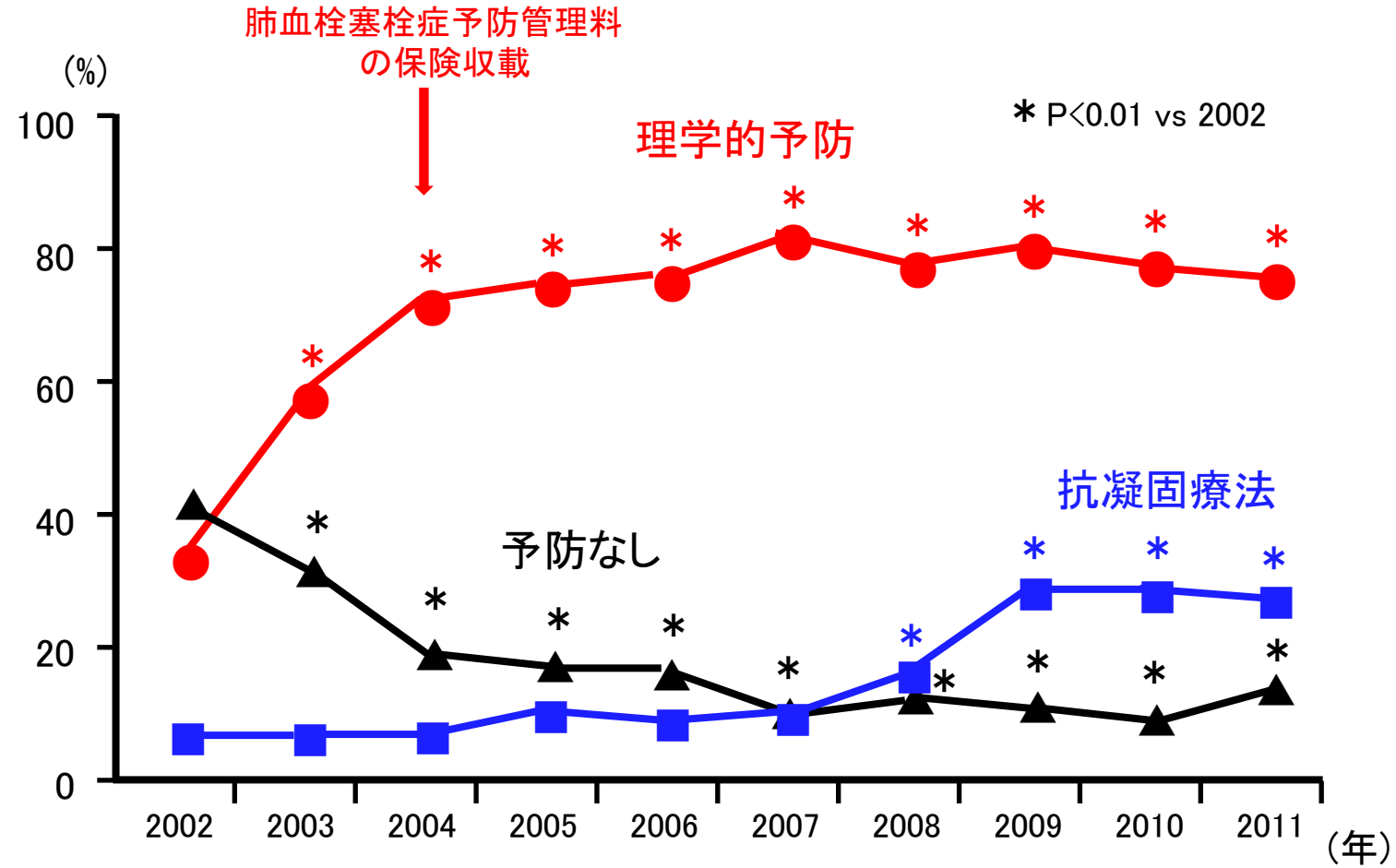


図6

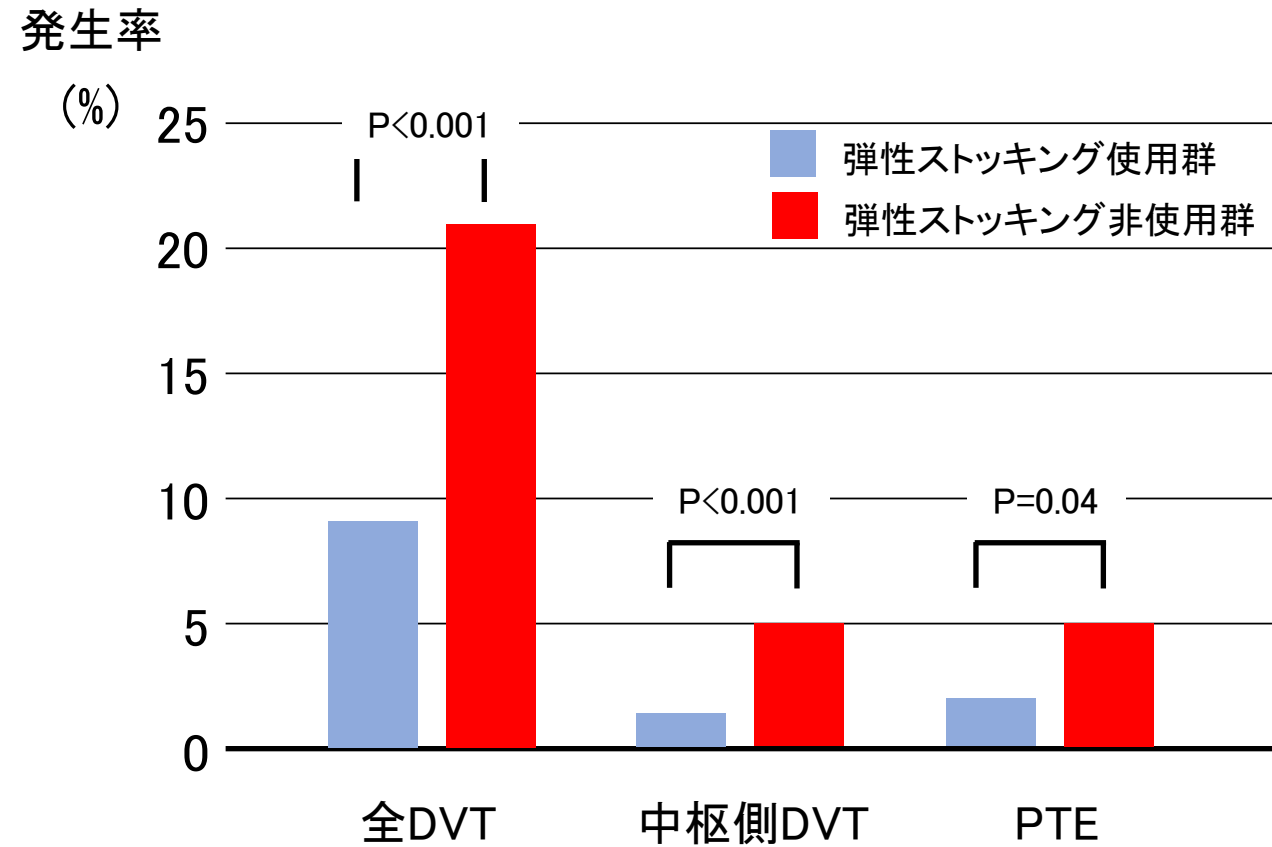


表 1 医療事故の再発防止に向けた提言（第2号）
急性肺血栓塞栓症に係る死亡事例の分析

【リスクの把握と疾患の認識】

提言 1 入院患者の急性肺血栓塞栓症の発症リスクを把握し、急性肺血栓塞栓症は“急激に発症し、生命を左右する疾患で、特異的な早期症状に乏しく早期診断が難しい疾患”であることを常に認識する。

【予防】

提言 2 «患者参加による予防»

医療従事者と患者はリスクを共有する。患者が主体的に予防法を実施できるように、また急性肺血栓塞栓症、深部静脈血栓症を疑う症状が出現したときには医療従事者へ伝えるように、指導する。

提言 3 «深部静脈血栓症の把握»

急性肺血栓塞栓症の塞栓源の多くは下肢、骨盤内静脈の血栓である。深部静脈血栓症の臨床症状が疑われた場合、下肢静脈エコーなどを実施し、血栓を確認する。

【早期発見・早期診断】

提言 4 明らかな原因が不明の呼吸困難、胸痛、頻脈、頻呼吸、血圧低下などを認めた場合、急性肺血栓塞栓症の可能性を疑い、造影CTなどの実施を検討し早期診断につなげる。

【初期治療】

提言 5 急性肺血栓塞栓症が強く疑われる状況、あるいは診断が確定した場合、直ちに抗凝固療法（ヘパリン単回静脈内投与）を検討する。

【院内体制の整備】

提言 6 急性肺血栓塞栓症のリスク評価、予防、診断、治療に関して、医療安全の一環として院内で相談できる組織（担当チーム・担当者）を整備する。必要があれば院外への相談や転院などができるような連携体制を構築する。

表2 静脈血栓塞栓症の付加的な危険因子の強度

危険因子の強度	危険因子
弱い	肥満 エストロゲン治療 下肢静脈瘤
中等度	高齢 長期臥床 うっ血性心不全 呼吸不全 悪性疾患 中心静脈カテーテル留置 癌化学療法 重症感染症
強い	VTEの既往 血栓性素因 下肢麻痺 ギプスによる下肢固定

血栓性素因: アンチトロンビン欠乏症, プロテインC欠乏症,
プロテインS欠乏症, 抗リン脂質抗体症候群など

文献 26) から引用

図1

VTE危険因子保有数別 症候性DVT疑い例での実際のDVT保有率

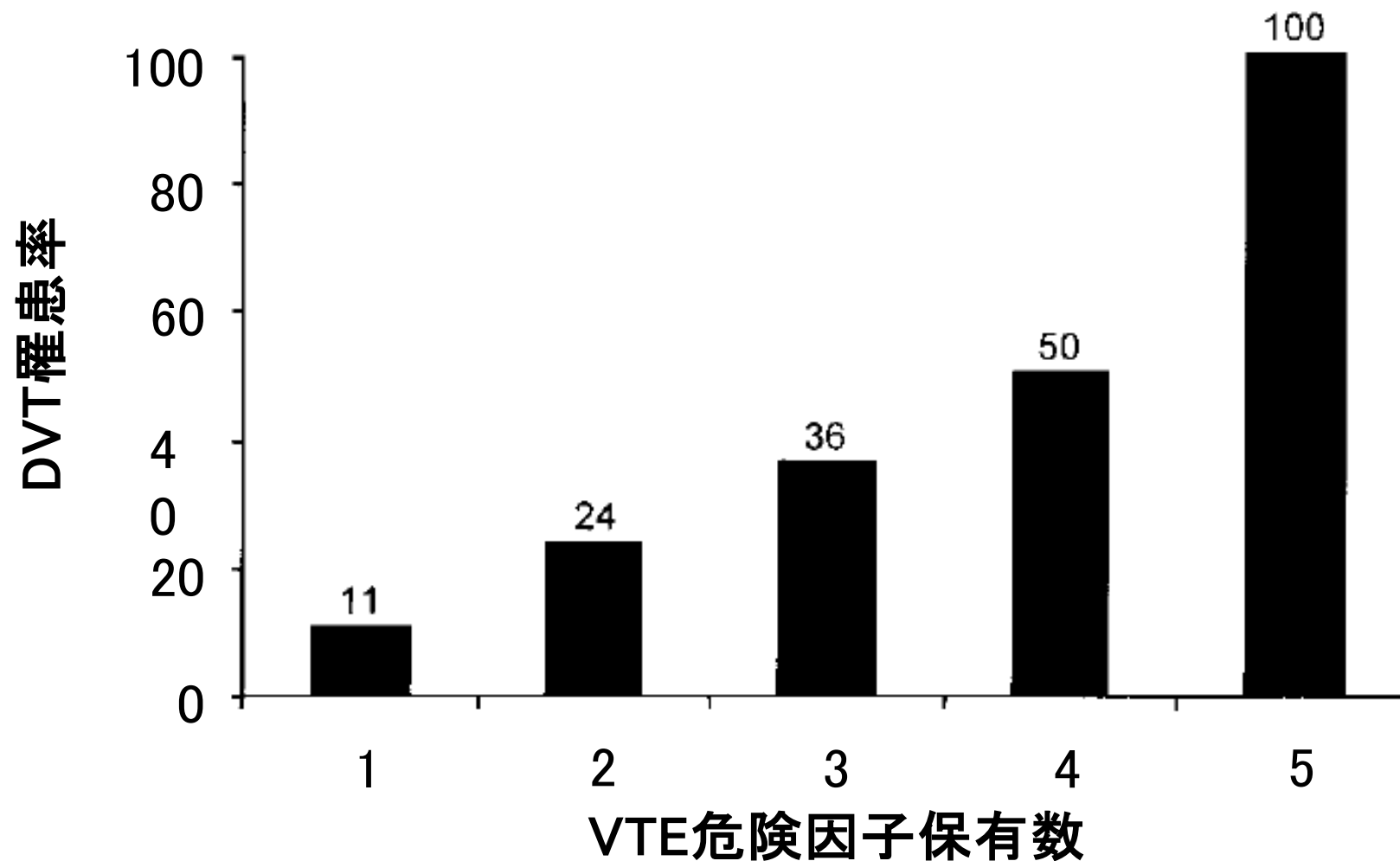


表1

Paduaリスク評価モデル

Variable	Score
活動性癌	3
VTEの既往	3
3日以上の活動性の低下*	3
既知の血栓性素因**	3
1ヶ月以内の外傷・手術	2
70歳以上	1
心不全 and/or 呼吸不全	1
急性心筋梗塞 or 虚血性脳卒中	1
急性感染 and/or リウマチ性疾患	1
肥満 BMI \geq 30	1
ホルモン治療中	1

Score	リスク	VTE発生率***
0-3	Low	0.3%
4 \leq	High 予防薬 +	2.2%
4 \leq	High 予防薬 -	11.0 %

*トイレ使用のみ許可されたベッド上安静(Bedrest with bathroom privileges)

**アンチトロンビン血栓症, プロテインC/S 欠乏症, 第V因子Leiden変異, プロトロンビンG20210A変異, 抗リン脂質抗体症候群

***入院後3カ月以内

(文献1より引用)

表2

IMPROVEリスク評価モデル

Variable	Score
VTE既往*	3
既知の血栓性素因	2
現在下肢麻痺あり	2
担癌	2
7日以上動けない**	1
ICU/CCUに入院中	1
60歳より年齢高い	1

Score	VTE発生率***
0	0.4%
1	0.6%
2	1.0%
3	1.7%
4	2.9%
5-10	7.2%

*VTE既往:入院3カ月以上前に発症歴あり

**動けない:24時間以上にわたってベッドか椅子上安静.

7日以上:入院直前の期間を含む

***入院後3カ月以内

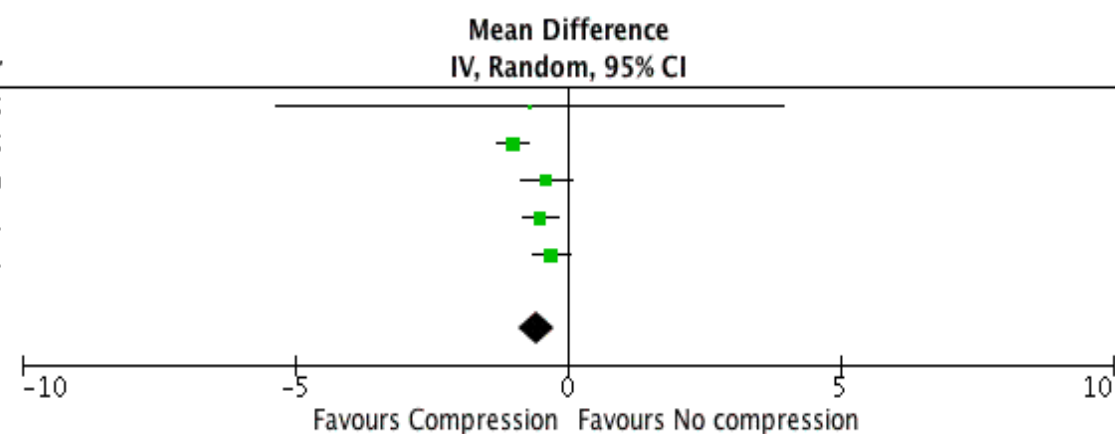
(文献4より引用)

図 1A: EVTA後疼痛スコア

Study or Subgroup	Compression			No compression			Weight	Mean Difference IV, Random, 95% CI	Year
	Mean	SD	Total	Mean	SD	Total			
Ayo 2016	2.11	8.9	39	2.81	12.9	46	0.5%	-0.70 [-5.36, 3.96]	2016
Ye 2016	2.3	1.4	200	3.3	1.6	200	27.5%	-1.00 [-1.29, -0.71]	2016
Pihlaja 2020	1.69	1.63	90	2.08	1.56	87	20.2%	-0.39 [-0.86, 0.08]	2020
Fischer 2021	0.4	0.7	48	0.9	0.9	48	26.2%	-0.50 [-0.82, -0.18]	2021
Fischer 2021-2	0.6	0.8	50	0.9	0.9	48	25.6%	-0.30 [-0.64, 0.04]	2021
Total (95% CI)			427			429	100.0%	-0.56 [-0.89, -0.24]	

Heterogeneity: $\tau^2 = 0.08$; $\chi^2 = 11.25$, $df = 4$ ($P = 0.02$); $I^2 = 64\%$

Test for overall effect: $Z = 3.45$ ($P = 0.0006$)



EVTA=endovenous thermal ablation

図 1B: EVTA後痛痛スコア (RFAまたはEVLA1470nm)

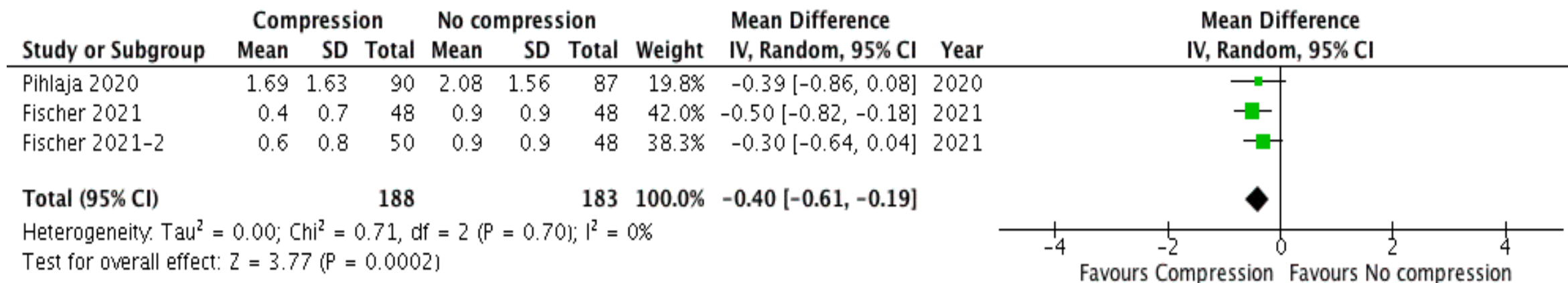


図 1C: EVLA 1470nm焼灼術(側枝静脈瘤治療併施なし)後疼痛スコア

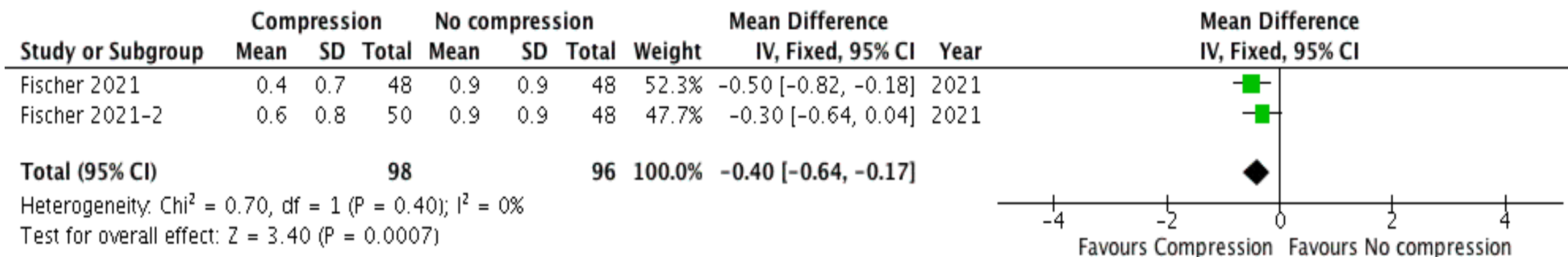


図 1D: EVTAおよび側枝静脈瘤治療併施後 疼痛スコア

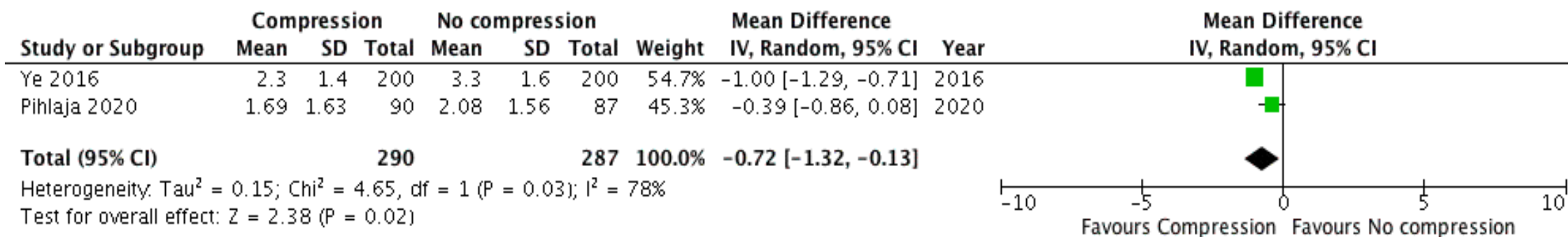


図 2 : EVTA後のDVT

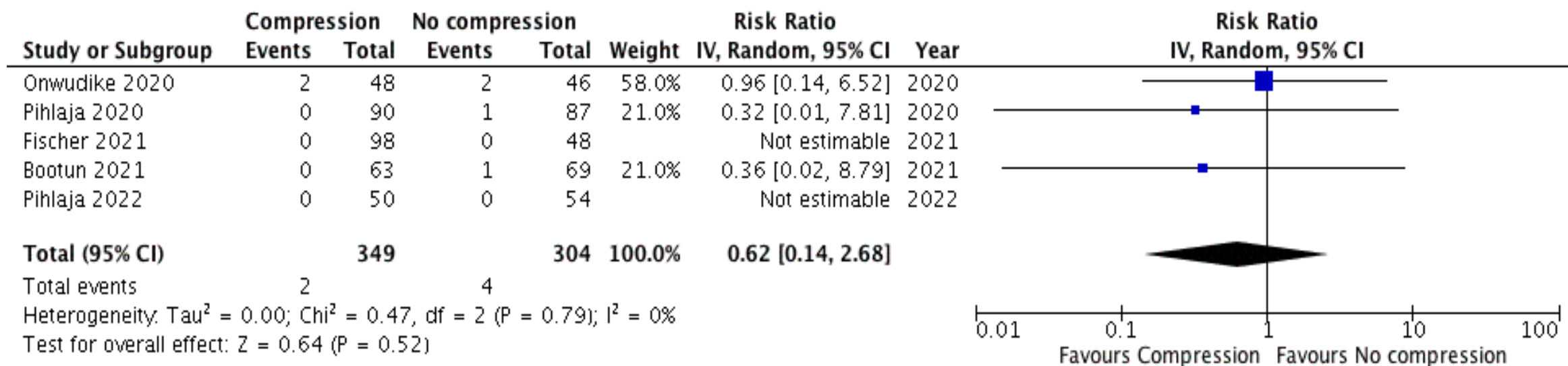


図 3 : EVTA後の重篤ではない有害事象

